

「低暮高思」 頭を低くして暮らし 高い志を持つ

真岡信用組合 理事長：塚田 義孝

気負いのないプラス思考

来年3月に創立60周年を迎える真岡信用組合の若き3代目理事長、塚田義孝氏は、かつてアパレルメーカーに勤務していただけに洗練されたファッションと親しみのあるさわやかな笑顔が印象的。金融関係のトップのイメージを刷新すると同時に、その誠実な人柄で同組合のイメージをぐっとアップさせている。

昨年6月25日に現職に就いてから8カ月ほど過ぎるが、「対外的な仕事が増えたことと、最終的判断をしなければいけないという責任の重さを感じている…。そこが今までと大きく違うかな」と今の心境を語る。その精神的プレッシャーさえ



Profile

塚田 義孝 (つかだ よしかか)



昭和36年4月29日、真岡市に生まれ、育つ。55年真岡高等学校卒業後、早稲田大学政治経済学部経済学科に進学。61年卒業と同時にアパレルメーカー(株)オンワード樺山に入社。平成4年4月地元に戻り家業である(株)塚常商店専務取締役役に就任。9年4月真岡信用組合に入組。益子支店、業務部、総務部長、常勤理事を経て、18年専務理事、22年6月から現職。休日には家庭サービスに励む、小学生の二娘の良き父親。(平成23年2月14日取材)

より、いろいろな人の話や意見をきちんと聞きながら、バランスをとって調整するのが、塚田流スタイル。

小学校で剣道、中学から高校まではバスケットボール部に所属、大学でも同好会に入っていた。ポジションは、調整、司令塔的ポジションのガード。中学では県ベスト8の戦績を持ち、高校でもせつせと部活に励む。「どんな成績は落ちてきましたね…(笑)」。一方、小学校でピアノを習い、高校ではロックバンドを組んでいたという意外な面もある。両親はあまり干渉せず、自由にさせてくれたように、アパレルメーカーに就職する時も、周りの人から「なぜ銀行系に入って修業をしないのか…」と言われる中、家族は「ああ、いいよ。好きな事をやって

調整の達人

も、気負いのないプラス思考で淡々とこなしているように見える。

創業者の祖父や前理事長の父親から特に言われたわけではないが、小さい頃から、将来は家業の商売や組合の仕事に就くことはなんとなく自覚していたという。4人兄弟の男一人として生まれ、小学校では学級委員長、中学校では生徒会長を務める。「お願いされるとノーマンという性格なので…。役を受ける時はいつも、自分の(成長の)為にと受けていた」そうだ。ガンガンやっていくといっ

おけ…」と理解があったそうだ。もしもいろいろな経験が、やがては力になると知っていたからかもしれない。

事実、大学時代の様々なアルバイトを通して多くのことを学んだ。特に、3年間続けた接客の仕事では、お客様が満足するサービスの基本を身に付け、褒められることの嬉しさを知る。

オンワード樺山では、1年目は営業として、消費者のニーズ、顧客のニーズをヒアリングし、企画部門にフィードバックする役割をこなしていた。2年目からは、企画の責任者である、MD(マーチャンダイザー)という重要なポジションに抜擢される。「服飾関係の知識も経験も浅いので、手探り状態

だった」といつつも、6年間携わっていた。


人のつながりこそが大切

母の「手伝ってくれ…」の二言で、ガソリンスタンドと雑貨の卸しをしている家業の塚常商店の専務として帰郷。「小さな店で従業員も少なかったので専務といっても現場で汗をかきながら体を動かしていた。日中給油や洗車、灯油の配達など体力的にもきつい毎日。今までの仕事とのギャップに悩んだこともあったようだが、元来楽家なので、物事を前向きに考え「おかげで肉体は鍛えられ鋼のような体になった」と笑う。やがて、時流の中で家業を閉じ、父が理事長を務める組合に入る。

「あくまでも一兵卒として、営業店の涉外担当なども経験。知識も経験もない世界だったので、一から勉強の日々だった」と振り返る。当時、銀行員は白いワイシャツが定番。アパレル経験のある塚田氏は、カラーシャツ。本人はごく普通のこととらえていたが、実は、とても目新しいことだった。同僚の人からも「自分たちも着たいと思っていた」と。まさに、先入観を打ち破り、新しく変わる第1歩だったとも言える。「少しずつ変わっていくかないと。良いものは残しつつ、変えていきたい」と語る。

「これからのことを考え、今は、その礎をつくる大切な時期。厳しい時代であっても発展していくようにがんばっていきたい」。そのために「いろいろな人と接することができるやりのある仕事なので、今の仕事に自信をもって欲しい。自分を磨くことをたえず意識し、人とのつながりをさらに広げて欲しい」と100名ほどの社員全員に熱いメッセージを伝えている。

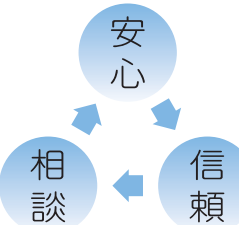
座右の銘は、えらぶらず腰が低く、口数が少ないのに威厳があった。じいちゃんこと創設者が、90歳を過ぎて色紙に書きつづった「低暮高思(ていぼこうし)こつし」という言葉。頭を低くして暮らし、高い志を持つという意。「歩んできたこと、経験してきたことが生かされる職場や立場。信用組合はお客様が一番近い存在。価値が多様化しているので今まで通りというのは難しいが、最終的には人とのつながり」と。今までの歴史を踏まえ、塚田氏らしい新しい第1歩を力強く踏み出している。



しんくみが大切にしている

「相互扶助」の精神。


それは「支え合いのこころ」。



「しんくみ」は人のきずなをもとに

地域のみならずまで

支え合っている金融機関です。



真岡信用組合

<http://www.moka.shinkumi.jp/>